

教員養成と音楽教育現場における ICT 活用

ICT utilization of Teacher education and a musical field of education

小林田鶴子(神戸女子大学)・兼古勝史(共栄大学)・井上大貴(共栄大学4年)

Tazuko Kobayashi (Kobe Women's University) Katsushi Kaneko (Kyoei University)

Daiki Inoue (Kyoei University)

(キーワード)

教員養成、小学校音楽科教育、学生ゼミ指導、eラーニング、AR(拡張現実)

要旨

近年、教育現場において多様な ICT 活用が行われているが、音楽教育・教員養成の分野では、未だ十分な活用がなされているとは言い難い。本研究では、教員養成系大学生向けの実践から「音楽理論」の授業における WebCT 活用の事例、及び現在もネット上での利用がなされている「教員・保育者養成のためのピアノ弾き歌い e-ラーニングコース」の紹介によって、その現状について考える。

また、学生指導という側面から、教員養成課程での「音楽教育現場での ICT 活用」を取り上げた卒業論文を紹介することによって、今後の音楽教員養成課程の学生に求められる、ICT に対する意識やその資質について考えてみたい。

1. 教員養成過程における ICT 活用

(1) 音楽理論の授業での活用

小林の当時の勤務校であった名古屋女子大学で、平成 17 年度に対面授業の補完として、WebCT による音楽理論の指導を行った。

WebCT とは学内で利用できるコースウェアで、対面授業で使われているテキストを元に、詳しい音声が出るようになっている画面と、それに関連する小テスト、及びテストに対する簡単な評価と誤答へのアドバイスやアクセス記録などが自宅でも見られるように作成した。これによって、音楽理論の不得意な学生でも、授業時間以外に復習ができ、授業につ

いて来られるようになるなどのメリットがあった。

(2) Web 上での e-ラーニング

学内だけで利用できるものではなく、Web 上で公開されている e-ラーニング教材として、深見友紀子(京都女子大学)が中心となって開発された「教員・保育者養成のためのピアノ弾き歌い e-ラーニングコース」(<http://oberon.nagaokaut.ac.jp/kwu/piano>)がある。これは、弾き歌いの模範演奏画面を、(ピアノを弾く)手の動き・顔の表情・全体の雰囲気 of 3 アングルから見る事ができるものである。掲載曲は、幼稚園教員採用試験などに出題される 7 曲で、注釈付き楽譜もプリントアウトできるようになっている。また、ワンポイントアドバイス付きの歌唱模範演奏映像もある。

(1) で紹介したのも含めたこれらの教材は、楽譜と音、演奏映像など、音楽に必須な音が実際に聴けることが大きなメリットである。また、誰でも自分の好きなペースで学習できる場所も e-ラーニングの特徴である。今後、次章で紹介する「AR」(拡張現実)の技術も含めた教材開発が教員養成過程においても行われることが望まれる。

2. 「音楽教育現場への ICT 活用の提案」

～教員養成課程学生の卒業論文から

(1) 概要：卒論指導の経緯

口頭発表後半は、教員養成系大学の教員学部学生

の卒業論文及びその指導の紹介を通して、今後の音楽教員養成課程の学生に求められる、ICTに対する意識やその資質について考えた。

今回紹介する卒論研究事例は、共栄大学教育学部の「音楽」ゼミに所属する学生（本発表の共同発表者、井上）によるものである。この卒業論文の取り組みは、当初(2015年度・学生3年次)に、当時当該大学・ゼミの指導教員であった小林が指導を担当し、小林の転勤に伴い、兼古が(2016年度・学生4年次)指導教員として引き継いだものである。

以下に同卒業論文の概要を記す。

(2) 研究目的

本卒業論文は、初等音楽科教育における発表活動の位置づけや意義を探り、発表活動を行うこと、及び、発表を記録・再現することの有意性について明らかにするとともに、発表活動をより意義深いものにするために、ICTを活用した仕組みについて検討し、提案したものである。

(3) 研究方法

発表活動の現状調査として、過去から現在までの小学校学習指導要領及び同指導書の、音楽における「発表」活動の扱われ方を調査した。また、実際の教育現場での扱われ方について、インターネット上で入手することができるいくつかの学習指導案及び、音楽科の学習指導について書かれた書籍等を調査した。次に、検討したICTを用いた再現手法を、音楽教室に通う児童・保護者を対象に、試験的な実践を行う。対象となる児童・保護者からの意見を受けて、仕組みのメリット・デメリット、発表活動の有用性について考察を行った。

(4) 結果と考察

初等音楽科教育における「発表」活動は、現行の小学校学習指導要領では明確に位置づけられていない。しかし、過去の学習指導要領では取り扱われており、「発表」活動に関する箇所の記述は、現行版では「共通事項」の指導に関連する記述に置き換わっていた。

一方、学習指導案及び書籍の分析から、実際の教

育現場では、現在も数多くの「発表」活動が取り扱われていることが分かった。しかし、多くの場合、児童に対する技術的評価のために行われている（「技能のための発表」）傾向にある。

(5) 提案

研究結果を踏まえて、卒業論文後半では、ICTを用いた発表再現手法の仕組みを提案した。教室内等に張り出される紙媒体に印刷された「QR」コード（二次元バーコード）、或いは演奏発表風景の写真等を入口とした「AR」（拡張現実）の手法により、児童の過去の発表や練習時の記録映像が楽譜とともにスマートフォンに掲示され、いつでも児童が互いに参照できる仕組みである。

(6) 結論

このようなICT機器を用いた「発表」形式の導入は、これまでの「技能のための発表」からの脱却の可能性を秘めている。ICT機器を用いて、記録と再現が容易に行えるようになったこと、児童の興味関心を惹く仕組みであることなどから、発表活動を技能評価のためだけではなく、関心意欲や鑑賞の能力とも関連付けて行うことが可能となるだろう。発表活動は表現と鑑賞を融合させた、有意義で重要な活動であるため、学習指導要領に明確に位置づけられるべきであり、ICT機器を活用することで、発表活動は更に価値のあるものになるだろう。

(7) 指導のまとめ

以上のような卒業論文及びその指導事例を報告した。指導においては、ICTの活用ありきの提案に陥らないよう、「発表」活動の歴史的変遷を振り返りつつ、指導要領・指導案等を含む教育現場での位置づけの変化や現状などについての調査に基づく、課題の発見と考察を踏まえて、その改善・解決に向けての提案となるよう留意した。

こうした点は、教育現場にICTを導入するにあたっての重要なポイントであり、音楽教員養成課程の学生に求められる、ICTに対する意識やその資質につながるものであらうと考える。